

## 2010年（平成22年）腸管出血性大腸菌感染者の発生状況

### 1. 腸管出血性大腸菌感染者の疫学情報

2010年、県内において66名の腸管出血性大腸菌(EHEC)感染者が発生しました。

月別のEHEC感染者発生状況では9月に30名と特に多く、夏に多い傾向がみられました(図1)。感染者は、年齢別では0~5歳が16名(24.2%)と最も多く、性別では男性が27名、女性が39名でした(図2)。

甲賀保健所を除く県下6保健所管内においてEHEC感染者の発生届出があり、多かったのは、草津保健所管内が27名(40.9%)、東近江保健所管内が23名(34.8%)でした。

感染者66名のうち、有症者は46名(69.7%)、20名(30.3%)は無症状病原体保菌者で(図2)、そのうち11名は接触者検診で見られました。有症者46名のうち1名にHUS(溶血性尿毒症症候群)の疑いが認められ、43名に下痢症状、39名に腹痛、EHEC感染者に特徴的な症状の一つである血便は32名に認められました。その他の症状として発熱(36.9~40.0℃)が16名に、嘔吐が13名に認められました。

### 2. 分離菌株の性状

EHEC感染者66名のうち入手した65株について性状を調べた結果、血清型はO157:H7が61株(93.8%)、O111:H-が2株(3.1%)、O157:H-が1株(1.5%)、O91:H-が1株(1.5%)でした。産生毒素型はVT1産生が3株(4.6%)、VT2産生が8株(12.3%)、VT1&2産生が54株(83.1%)でした。

アンピシリン(ABPC)、クロラムフェニコール(CP)、テトラサイクリン(TC)、ストレプトマイシン(SM)、カナマイシン(KM)、ゲンタマイシン(GM)、セフォタキシム(CTX)、オフロキサシン(OFX)、ナリジクス酸(NA)、ST合剤(ST)、シプロフロキサシン(CPFX)およびホスホマイシン(FOM)の12薬剤に対してセンシ・ディスク(Becton Dickinson製, USA)を用いて薬剤耐性試験を実施した結果、供試した65株のうちABPC・TC・SMの3剤耐性株が1株、ABPC・SMの2剤耐性株が1株、SMの単剤耐性株が2株、ABPC単剤耐性・CP単剤耐性およびTC単剤耐性がそれぞれ1株でした。

パルスフィールド電気泳動(PFGE)法による遺伝子解析で同一のPFGEパターンを示した株が9グループ見られました。構成株数は2~27株で、構成菌株数の合計は46菌株でした。27株で構成された1グループは届出日が近く、やや限局された地域で発生しました。PFGEによる細菌学的疫学解析から同一起源由来が疑われ、喫食調査など疫学調査が行われましたが、感染源および感染経路の解明には至りませんでした。

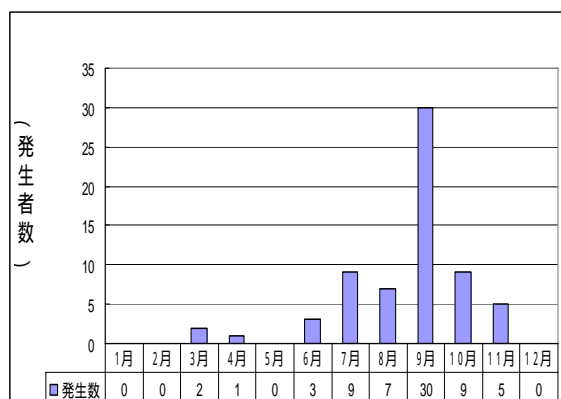


図1 月別発生状況

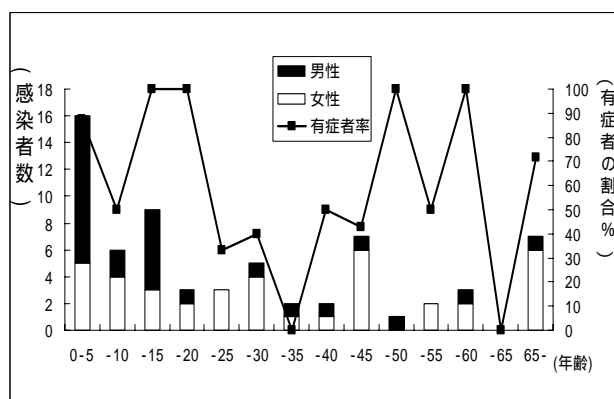


図2 性別、年齢別の感染者数および有症者の割合